

2021年4月24日

復活節第四主日

菊地功大司教 メッセージ

「わたしは良い羊飼いである」とイエスはヨハネ福音で宣言されます。「良い羊飼い」がいるのであれば、「悪い羊飼い」もいるのですが、それをイエスは「自分の羊を持たない雇い人」と述べ、羊のことを自らの一部として心にかけることのない者だと指摘します。すなわち神は、ご自分が賜物としていのちを与えられたわたしたちを、ご自分の羊、ご自分の一部として心に向け、その羊のためならば命をかけるとまで宣言されます。その上で、イエスは、ご自分の羊となっていない羊の存在をも心に向け、「ひとりの羊飼いに導かれ、一つの群れになる」ことが最終的な目的であることを明示します。

使徒言行録は、ペトロとヨハネが共に、足の不自由な人をいやしたことで捕らえられ、議員、長老、律法学者たちから、「お前たちは何の権威によって、誰の名によってああいふことをしたのか」と尋問を受けた時の、ペトロの答えを記しています。自らが権威をもって人々を教え導いていた議員、長老、律法学者にしてみれば、自分たちこそが民の指導者、すなわち羊飼いであるとの自負があったことでしょう。それを打ち砕くように、どこの誰とも分からないペトロたちが人々からの賞賛を浴びていたのですから、困惑や妬みから、二人をゆるすことが出来なかったのかもしれませんが。

それに対してペトロは、イエスこそが救いをもたらす真の羊飼いであることを、高らかに宣言します。しかもその羊飼いは、すべての人の救いのために、すでに自らの命を捨ててその愛をあかししているのです。人々から見捨てられた主は、今や復活されて、動くことのない隅の親石として世界を支配しているのだと、明確に宣言します。

イエスご自身が明示されたように、「ひとりの羊飼いに導かれ、一つの群れになる」ことが最終的な目的であるならば、ペトロがそうしたようにわたしたちも、真の羊飼いの存在を高らかに告げ知らせなければなりません。使徒ヨハネも手紙に、「世がわたしたちを知らないのは、御父を知らなかったからです」と記していますが、そうであればこそわたしたちは、御父の存在を告げ知らせなくてはなりません。

教会は復活節第四主日を、世界召命祈願日と定めており、司祭や修道者への召命のために特に祈りを捧げる日となっています。例年であれば、教区の一輪会が主催して、この日の午後に東京のカテドラルでは、神学生や志願者を招いて召命祈願ミサが捧げられてきました。残念ながら、昨年が続いて今年も、このミサは中止となりましたが、あらためてみなさまには、司祭・修道者への召命のために、またその道を歩んでいる多くの方のために、お祈りくださるようお願いいたします。

もちろん召命を語ることは、ひとり司祭・修道者の召命を語ることにとどまるのではなく、すべてのキリスト者に対する召命を語ることでもあります。司祭・修道者の召命があるように、信徒の召命もあることは、幾たびも繰り返されてきたところです。わたしたち皆が、ペトロに倣って、真の羊飼いの存在を高らかに告げしらせる、言葉と行いによるあかしの業に取り組まなくてはなりません。

同時に教会共同体には、真の牧者に倣ってそれぞれの群れを導く牧者も必要です。生活のすべてを賭けて福音をあかしする修道者も必要です。世界召命祈願日にあたり、信徒一人ひとりが固有の召命に目覚め、また司祭修道者の召命に目覚める人がひとりでも多くあるように祈りましょう。